

朗報！！

一年間漂流し続けた「月田丸」は、新たに帆を上げることができそうです。

ポルトガルギターを弾いてくださる人が見つかったのです。

確約を頂いて何日かは、ひょっとして夢ではないのか、一方的な思い込みでしかないのではないのか、半分信じられないまま、過ごしました。そして、じわじわと、こみ上げる喜びに、月に、太陽に、星に、吹きすぎる風に、青空に、白い雲に、朝鳴く鳥にさえ、「ありがとう」と叫んでいる今日の私です。

過去の思い出に、未来の夢にも、封印をした日々。ライブでの拍手、「また是非ライブを」との声から逃げ続けた一年。涙を流すことさえ拒否した結果なのだろう、精神的に極限状況だった。悲しみと悔しさではりさける心で歌い続け、それでも壊れることもできず、生きる力が萎えてゆくのを呆然と眺めていた日々。振り返ることさえ怖くて、頭を上げるのも怖くて、小さく小さくかがみこんでいた日々。その頃書き留めた詩がある。

哀しいファドは
私をうちのめす

まぶしすぎる現実に
目を開けていられないほど
正確に刻む時の足音に
耳をふさいでしまうほど
自らの力のなさに
立ち止まってしまうほど

なのに
次の瞬間
私は

目を開き
耳を澄まし
疲れた足取りで
歩き始める

そして また
哀しいファドを
歌い始める

そして、今、氷が溶けてゆくように、静かに、過ぎた一年のことが私の中を流れてゆく。

最後の関西でのライブを終えたときのこと。

自らを奮い立たせるように、ギタリストを探しに行ったポルトガルでの日々のこと。

去年の秋の、カルロス・ゴンサルヴェスとの嵐のようなコンサートツアーのこと。

「ファディスタ月田秀子」もこれまでかと、何度幕を下ろしかけただろう。



そんな私を、支えつづけてくれたのが、ギターの蓮見氏だった。「なにも歌えなくなったわけじゃないんですから、頑張りましょうよ、月田さん」その言葉にすがるように、二人でこなしできたライブのこと。

それは、足利「なんぶう食堂」でのライブから始まった。思いがけない観客の熱い拍手に、「やってゆける」という手ごたえを感じた。それからひたすら漂流しつづけた「月田丸」は、帆をなくしても幸い船体は無事だった。難破しなかったのは、協力な助っ人たちのお蔭だ。

竹花加奈子のチェロの深く大きな響きは、マヌエルでのライブの空気を、より豊かなものにしてくれたし、ヴァイオリンの平松加奈は、奔放さの中に悲しみをたたえた演奏で、熱狂とそのあとのすがすがしさを教えてくれた。同じくヴァイオリンのfumikoの、はなやかさの裏にある憂いをたたえた響きは、ポルトガルのミュージシャン達との出会いの風をまとっていた。ピアノの伊賀拓郎は、みなぎる若さとしなやかさで私の歌に新風を吹き込んでくれた。

そして、ギターの蓮見昭夫は、素晴らしいバランス感覚で私たちを支えてくれた。ポルトガルギターのカルロス・ゴンサルヴェスとの凄まじいほどのバトルにも決してめげることなく、カルロスのあの天衣無縫、とめどなくあふれ出るマグマのような熱い演奏をしっかりと受け止めてくれた。

いまさらながら、いや、今になってようやく冷静に観ることができるようになったというべきだろう、彼らに心から賞賛と感謝をこめて、お礼をいいたい。

ありがとう！

「バックがどう変わろうと、月田ファドは、変わらない」「なにがどうであれ、応援しつづける」そう言って、支えつづけてくださった友人たちに、そして、一年間、新しいファドの模索を見守り、聴きつづけて下さったファンの皆様、月田の復活を待ちつづけてくださった皆様に、心から「ありがとう！」

2007年の年頭のごあいさつを、遅ればせながらではありますが、このように、すがすがしく、そして希望に満ちた想いで、できることを心から嬉しく思います。つい2日前には考えられなかったことです。

新しい気持ちで、新しいユニットで、心を込めて歌ってゆきたいと思っています。一曲一曲いろんな想いを抱きながら。

(2007年1月16日 記)



さようなら、カルロス！ さよなら、私の夢・・・

怒涛のように過ぎていったコンサートツアーだった。

最終公演は名古屋で飾った。公演終了後の打ち上げのあと、3時半ころまで飲んでた。朦朧とした頭で、5時半に、ゴンサルヴェス夫妻にモーニングコール。外波山氏が車でホテルから空港まで送ってくださった。カルロス、シウヴィア、外波山氏、私、それぞれの顔を赤く染めて朝日が昇ってゆく。感動的なシーンのはずだったが、皆の目はうつろだった。朝焼けは全くそのときの雰囲気似合わなかった。私たちは、2週間近い日々、共にコンサートツアーを闘った戦友だった。私にとっては、勝ち負けのない自分自身との戦いだった。カルロスにとっては、全身に出た発疹の痒みとの戦いでもあった。

その戦いの火蓋は、来日した翌日に切って落とされた。

10月26日早朝、ゴンサルヴェス夫妻は、18時間近い長旅を経て、無事成田空港着。ポルトガルギターは？と訊ねると、カルロスはおどけるようにくると背中を向けた。ポルトガルギターがコンパクトにソフトケースに収まっていた。カルロスと親子ほど年の離れた愛妻シウヴィアと、初対面の抱擁。はじき返されてしまいそうなゴム毬のようなバストには、正直圧倒されたが、てらいもなく堂々と歩く姿は、遅しく、いやらしさのみじんも感じられない。珍しそうに見入る日本人の目つきの方がよほどいやらしい。さすがブラジルの元お嬢さん（ちょっと失礼）。

その日の夕方には、ゴンサルヴェス夫妻と共に秋葉原の電気街の雑踏の中を右往左往していた。「I-pod」と「play station」が買いたいという彼らの要望だ。

私自身興味のない「モノ」の上、彼らが望むものと、店員の言うことの通訳に四苦八苦。それは、通訳という役目のしんどさを味わう第一歩にすぎなかった。

翌日は、昼過ぎから、我が家でリハーサルの予定だった。約束の時間を1時間ほどオーバーしてやっと、彼らは我が家にやってきた。カルロスは、痒みがひどくて眠ることもできないという。リハーサルどころではない。2日後には、島田でのコンサートが控えている。

取り急ぎ皮膚科を探して、病院へ向かった。診察がまた大変だった。ドクターとカルロスの間で、通訳第二弾の始まりだ。医学用語は全くお手上げ状態。

とりあえず全身に広がった発疹に軟膏を塗ってもらう。若い女性の看護婦さんだ。カルロスは嬉しそうに鼻の下を伸ばした。それから1時間半ほど点滴。その間に、ギターの蓮見氏たちの待機しているわが家に状況説明のため帰る。カルロスのポルトガルギターを抱きしめながら、病状がよくなることを祈った。

家には、蓮見氏と、今回のカルロスとのコンサートツアーを撮影してくれる手崎氏の心配そうな顔がそこにあった。

点滴を終え、予定時間をはるかに遅れて、リハーサル開始。ポルトガルギターを弾く彼は、病院のベッドに横たわっていた彼とは、全く打って変わって別人だった。しかし、原因不明のまま、「痒み」「湿疹」は、容赦なくカルロスを襲い、以降、ツアーの先々で入院点滴を繰り返すことになる。痒みは人を発狂させ、死に至らせる武器にもなるのだ。しかし、彼には、50年近いキャリアと、アマリア・ロドリゲスのギタリストとしてのプライドと自信があった。シウヴィアのなみなみならぬ愛情もあった。

カルロスも、そしてシウヴィアも英語はほとんどしゃべれないときている。主催者としての打ち合わせ、チケット売り、発送、ホテル、JR、航空券の手配等のマネージャー役、エスコート役、に加えて、またひとつ、付き添い人としての仕事がかかってくるようになった。そして、なによりも私は、歌手だった。歌手になるのは、コンサート本番の時だけだった。

2週間近く続いたそんな壮絶な戦いも終わろうとしていた。

ポルトガルへ帰国する朝、ようやく痒みも発疹も、治まってきたようだ。かなりのステロイドを投与されたせいか、ムーンフェイスという特有の症状でカルロスの顔は、腫れていたが、顔のただれもきれいに消え、かえって若返ったように見える。空港で、アルコールの残った胃に、たいして美味しくもないコーヒーを流し込んでいる私を尻目に、カルロスはトーストとスクランブルエッグとココアをあつという間にたいらげた。もう無理して朝から腹ごしらえしなくてもいいのだ、これ以上闘わなくてもいいのだという安堵感が私の心を占めていた。

彼らの最後の要望、「機内での通路側の席」を確保するまでは、帰るまいと、チェックインカウンターの前で一緒に並んでいる私に、カルロスが、あとは大丈夫だから、帰るように勧めてくれた。かなり疲れきった顔をしていたのだろう。飛行機が出発するまでまだ3時間以上あった。チェックインカウンターはまだ当分開く気配もない。ありがたい勧めだった。翌日は河口湖でのコンサートがある。少しでも早く東京へ戻って休みたかった。その申し出に甘えて、「通路側の席をお願いします。」と書いたメモをカルロスに渡して、彼らを空港に残し東京へ向かった。何度も振り向く私に彼らは手を振りつつしてくれた。

怒涛の後にはあっけない別れだと思った。

一路東京へ向かう新幹線の中、なぜか心が虚しさで一杯になっていった。「一体、私は何をしたかったのか？」ポルトガルギターで歌いたかった、ただそれだけだったのに…。なんとたかさんの人たちを、自らの「夢」の巻き添えにしてしまったことか。そしてその夢にみごと裏切られた惨めな私がいいた。

暗闇の中でもがき続けた。どうやら、あの壮絶な戦いの中で、私の中で何かがショートしてしまったようだった。壊れてゆく自分。このままでは駄目になる。11月18日の小諸ユースでのライブを終え、私は心療内科の門を叩いた。

エーイツ、引越しだーい！

追い詰められていたのは、精神面だけではなかった。経済的にも極限だった。

インターネットで探した物件を見に行き2日目、引越しが現実になった。心配してくれた中学の同級生二人が新居の掃除を手伝ってくれ、人生相談にもものってくれた。東京へ来て5年目、彼女達は会報の発送、チケットの発送、コンサートの受付等、ことあるごとに手伝ってくれる。それだけでも、東京へ帰ってきてよかったと思っている。「幼馴染」はほんとうにかけがえない宝物だと思う。それから一週間後に「大森」へ引っ越した。

引っ越して10日が経ち、部屋の中もかなり落ち着いた。丘の上にあるので三階でも展望がいい。昇る太陽を見るのが楽しみで目が覚める。朝日が昇るころ、羽田空港を発着する飛行機が朝焼けの空を横切ってゆく。朝日だけでない、空も、月も見える。日が昇ると待っていましたとばかり鳥たちがさえずりはじめる。豆腐売りのラッパの音も聞こえてくる。

そして、今こうして、パソコンに向かえるまでに、心は回復した。ごちなくも人ごみの中を歩けるようになった。「時間薬」いや「日にち薬」が効いてきたのだろうか？(2006年12月18日記)



informação

●今のところ決まっているライブ・コンサートスケジュールは、以下です。

各地のファド・月田秀子ファンの方々が、創意と熱意をもって主催してください。(中には、50名ほどのギャラリー、お店もあります。) 周辺でライブができそうでしたら、足を伸ばせる限り伸ばして、旅をしてゆきたいと思っています。

ご協力いただけそうな方がいらっしゃいましたら、お気軽に月田秀子ファド倶楽部までご連絡ください。

新しいユニットでの活動をひとつずつ増やしてゆきたいのです。点さえできれば、私たちはそれらを結んでライブツアーを組むことができます。

- 6月 16日(土) 広島「アビエルト」
17日(日) 大正「アゼリアホール」
9月 30日(日) 甲府(会場未定)
10月 2日(火) 松本(会場未定)
18日(木) 大阪・帝国ホテル「チャペルコンサート」
20日(土) 福井「ギャラリー サライ」
21日(日) 金沢「茶房 犀せい」
11月23日(金・祝) 大阪・堺「能楽会館」

●東京「マヌエル」での定期ライブは、今年も、基本的に毎月第一週の月曜(渋谷)、火曜(四ツ谷)、水曜(四ツ谷)にやってゆきますが、変更する場合がありますので、いずれも前もってご予約くださいますようお願いいたします。

●当会報に毎月ファドの訳詩を寄せてくださっている「カウド・ヴェルデ」のアマリア・ロドリゲス詩集『歌いながら人生を』(2006年10月、彩流社発行、定価2,200円)好評発売中です。お申し込みは、ファド倶楽部でも承っています。

●事務所・自宅移転のお知らせ。下記に引っ越しましたので、住所録等の訂正をお願いいたします。
〒140-0014 東京都品川区大井7-14-2-301
TEL/FAX : 03-3776-6238

●月田秀子の7枚目のアルバムCD「夜のファド」が残り少なくなりました。お申し込みの方は、ファド倶楽部まで。

●今号誌上掲載の写真は、東京のヤクルトホールでのコンサート時に、金子由郎さんが撮影してくださったものです。写真なのに声が聞こえてくるようで、不思議です。もっとちゃんとした形でご覧いただけないのが残念です。

<月田秀子のスケジュール>

2月5日(月)	東京・渋谷「マヌエル」 *要予約	予約・問合せ: tel/03-5738-0125
	開場: 18:00 ライブ: 20:30~(約1時間)	料金: 6,000円(ディナー・ライブチャージ込み)
6日(火)	東京・四谷「マヌエル」 *要予約	予約・問合せ: tel/03-5276-2432
7日(水)	「NOITE DE SAUDADE Vol.40」	
	開場: 18:00 ①20:30 ②21:30 ③22:30	ライブチャージ: 2,500円(入れ替えなし)
	♪出演者: 蓮見昭夫(ギター)	
	竹花加奈子(チェロ)9日(火)	
	fumiko(ヴァイオリン)10日(水)	
3月5日(月)	東京・渋谷「マヌエル」 *要予約	予約・問合せ: tel/03-5738-0125
	開場: 18:00 ライブ: 20:30~(約1時間)	料金: 6,000円(ディナー・ライブチャージ込み)
6日(火)	東京・四谷「マヌエル」 *要予約	予約・問合せ: tel/03-5276-2432
7日(水)	「NOITE DE SAUDADE Vol.41」	
	開場: 18:00 ①20:30 ②21:30 ③22:30	ライブチャージ: 2,500円(入れ替えなし)
	♪出演者: 蓮見昭夫(ギター)	
	竹花加奈子(チェロ)9日(火)	
	fumiko(ヴァイオリン)10日(水)	
4月2日(月)	東京・渋谷「マヌエル」 *要予約	予約・問合せ: tel/03-5738-0125
	開場: 18:00 ライブ: 20:30~(約1時間)	料金: 6,000円(ディナー・ライブチャージ込み)
	♪出演者: 蓮見昭夫(ギター)	
	飯泉昌宏(ポルトガルギター)	
3日(火)	東京・四谷「マヌエル」 *要予約	予約・問合せ: tel/03-5276-2432
4日(水)	「NOITE DE SAUDADE Vol.42」	
	開場: 18:00 ①20:30 ②21:30 ③22:30	ライブチャージ: 2,500円(入れ替えなし)
	♪出演者: 蓮見昭夫(ギター)	
	飯泉昌宏(ポルトガルギター)	

fados canções

OIÇA LÁ Ó SENHOR VINHO

Letra e Musica-Alberto Janes

Oiça lá ó senhor vinho
Vai responder-me mas com franqueza
Porque é que tira toda firmeza
A quem encontra no seu caminho
Lápor beber um copinho a mais
Até pessoas pacatas
Senhor vinho em desalinho
Vossa mercê faz andar de gatos

É mau procedimento
E há inatenção naquilo que faz
Entre-se em desequilíbrio
Não há equilíbrio que seja capaz
As leis da física falham
E a vertical de qualquer lugar
Oscila sem se deter
E deixa de ser perpendicular

Eu já fui, responde o senhor o vinho
A folha solta a brincar ao vento
Fui raio de sol no firmamento
Que trouxe à uva doce carinho
Ainda guardo o calor do sol
E assim eu até dou vida
Aumento o valor seja de quem for
Na boa conta peso e medida

E so faço mal a quem
Me julga ninguém faz pouci de mim
Quem me trata como água
E ofensa pago-a eu cá sou assim
Vossa mercê tem razão
É ingratição falar mal do vinho
E a provar o que digo
Vamos meu amigo a mais um copinho

註：ヴィーニョは、ポルトガル語で「ぶどう酒」のこと。
北原白秋が詩集「邪宗門」の第一篇の詩の中で「珍醪（ちんた）の酒」と詠んだのは、ポルトガル語のVinho Tinto（ヴィーニョ・ティント）、日本語で赤ワインのことと思われる。
明治四十二年一月に発行された詩集「邪宗門」の「邪宗門秘曲」の中にその言葉は見出される。
中学か高校の国語の時間に読んだ覚えがあるのだが、今、全編を、読み返してみても、アルコールの名詞がかなり出てくるのに驚いた。前述の「珍醪の酒」をはじめ、アブサン（茴香酒）、キュラソオ、ウイスキー（Whisky）、焼酎、梅酒、ブランデーが登場してくる。
そこには、哀しさ、憂い、甘美なあこがれ、まさにSaudade（サウダーデ）の世界が、広がっている。
例えば、次の一篇。

失くしつる

失くしつる
さはあるべくもおもはれぬ。
またある日には、
探しなば、なほあるごともおもはるる。
色青き真珠のたまよ。

もし ちょいとヴィーニョの閣下

訳 カウド ヴェルデ

もし ちょいと ヴィーニョの閣下
正直にお答えくださいよ
あなた様の許に近寄る人を
なぜ骨抜きになさるんで
もう一杯と盃を重ねるうちに
謹厳実直な御仁でさえ
羽目はずして
フラフラと千鳥足

いけませんや
わざとあんなことをなさっては
酔いがまわると
バランスつてものがなくなって
物理の法則も通用しなくなるんでさあ
どこでも垂直でいられるはずが
体が勝手にユラユラして
まっすぐ立ってもいられない

ヴィーニョの閣下は答えていわく
ワシは葉っぱを風に舞い散らせ
青空の下 陽射しを浴びて
ブドウの甘みを育んだのじゃ
今でも太陽の暖かさがたっぷり詰まっておる
だからワシは人を元気づけ
誰であれ ちょっと気を大きくしてもやれる
丁度良い具合にな

それにワシは懲らしめもする
ワシのことを取るに足らないと甘くみる奴や
ワシを水のようにがぶ飲みする奴はな
そうして一矢を報いる これがワシのやりかたじゃ
なるほどあなた様の おっしゃる通り
ヴィーニョを悪く言うなんて 恩知らずも甚だしい
本当にそう思っている証に
さあさ もう一杯やりやしょう



<編集後記>

「月田丸」の行く末を案じてくれている友人から、簡潔なメールが届いた。

“気持ち焦って身体がグズグズ……は共通テーマですか（笑）緩急をつければ何とかやれるみたいではある、というのが、今ところ私のゆる〜い解決策ですが。無理はよしましよネ。” 毎回、会報には、彼女の指紋も付いています。

今年もよろしく。お便り、投稿お待ちしております。（月田）

月田秀子ファド倶楽部ホームページ

<http://www.fado.jp/>

- 月田秀子ファド倶楽部ジャーナル 第53号
- 2007年1月25日発行（季刊：年4回発行）
- 編集・発行「月田秀子ファド倶楽部」事務局
- 〒140-0014 東京都品川区大井7-14-2-301
- TEL&FAX 03-3776-6238